



四季成り性イチゴ「なつあかり」、「デコルージュ」のランナー発生に必要な低温遭遇時間

研究のねらい

イチゴのランナーは低温により休眠覚醒した後に高温・長日条件で発生が促進されるが、休眠覚醒に必要な低温遭遇時間には品種間差があり、また遭遇時間により発生数が異なる。四季成り性イチゴは、一般に一季成り性イチゴに比べてランナー発生数が少なく、夏秋どりイチゴとして期待されている四季成り性イチゴ「なつあかり」「デコルージュ」が、今後普及する上で問題となりかねない。そこで、両品種のランナー発生に必要な低温遭遇時間を明らかにし、効率的な増殖を行うための情報を得る。

成果の内容

- ①屋外で低温遭遇させた後、最低気温15℃の温室に搬入する場合、屋外での5℃以下の累積時間が1,000時間以下の時、両品種とも12月～4月の試験地（盛岡）の自然日長（平均11時間10分）ではランナーが発生しない。温室での日長を延長すると、両品種とも1000時間以上でランナーが発生する。また、2000時間までの範囲では、低温遭遇時間が長いほど、ランナーは多く発生する傾向がある（図1）。
- ②温室に置いて低温に遭遇させていない苗を12月中旬から冷蔵（-1.5℃設定）し、所定期間経過後温室に戻し16時間日長下に置くと、「デコルージュ」では冷蔵30日間以上で、「なつあかり」では60日間以上でランナーが発生する。150日間まで冷蔵した場合、両品種とも90日間でランナー発生数は最大となり、それより長く冷蔵してもあまり増加しない(図2)。

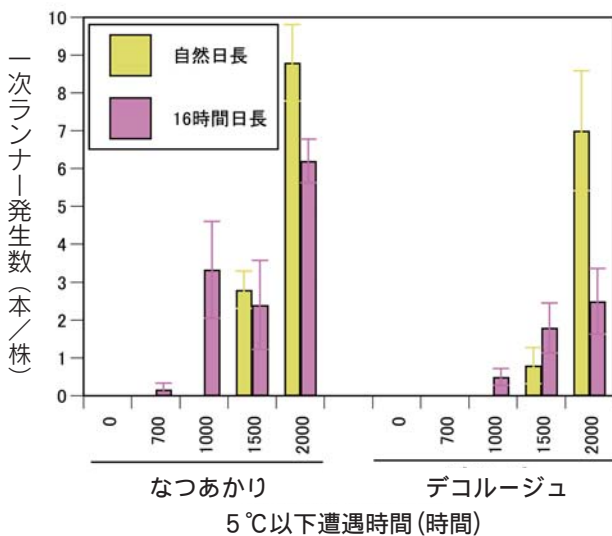


図1 屋外での低温遭遇時間（5℃以下）およびその後の日長と「なつあかり」「デコルージュ」のランナー発生

(注) 温室搬入後3ヵ月間に発生した一次ランナー数
直径21cmのポットを使用

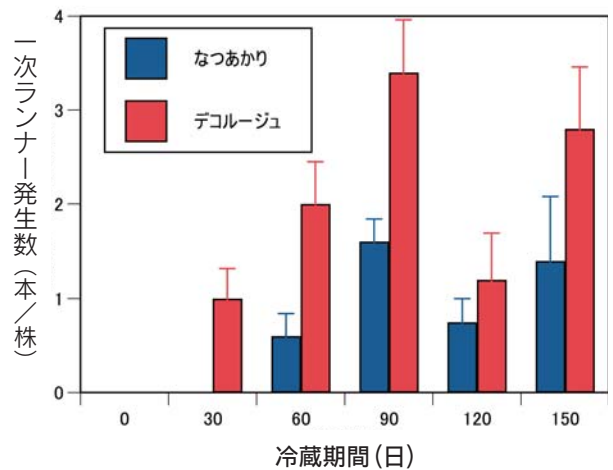


図2 冷蔵期間（-1.5℃）の長さによる「なつあかり」「デコルージュ」のランナー発生

(注) 温室搬入後3ヵ月間に発生した一次ランナー数
直径13.5cmのポットを使用

成果の利活用

必要な低温量が確保できない気象条件や作型あるいは早期に採苗したい場合は、株冷処理に適した温度に管理できる低温庫があれば、ランナーを発生させて苗を増殖することができる。